

「南無阿彌陀仏」って

何ですか

それなりに充^{じゅう}実^{じつ}しているけど

何^{なに}か物^{もの}足^たりない毎^{まい}日^{にち}、

「生^いきるって、こんなもの?」

「心^{しん}底^{そこ}、満^{まん}足^{ぞく}できることってないのかしら」

そんなぼんやり不安な心ふあんこころが

は晴れて満足まんぞくできる。

そんな幸せしあわせがあるんだよ

と仏教ぶつぎょうは説といています。

キーワードは

「南無阿弥陀仏なむあみだぶつ」

どんなことなのでしょう？



暑さ寒さも彼岸まで、といわれますが、彼岸のある3月は、冬から春への季節の変わり目です。

彼岸には、墓参りへ行く人も多いでしょう。墓前で手を合わせる時、大半の人は「南無阿弥陀仏」と称え、今は亡き人たちに、「どうか幸せになつて」とか「一生懸命に生きるから見守つてね」と話しかけたりします。いわば死者の供養のために称えるものが「南無阿弥陀仏」と思っている人が多いのではないのでしょうか。

あるいは暗い夜道を歩く時、魔除けのつもりで「南無阿弥陀仏」と称えている人もいます。

このように、様々な思いで称えています。

彼岸とは



「彼岸」とは「此岸」に対する言葉で、仏教に由来します。

「此岸」は、大きな川を挟んでこちらの岸のことで、私たちの住む世界のこと。仏教では娑婆世界ともいいます。娑婆とは昔のインドの言葉で、堪忍土と訳され、耐え忍ぶ世界のことです。「彼岸」は川のあちら側の岸で、阿弥陀仏の極楽浄土を表しています。

すが、そもそも「南無阿弥陀仏」とは一体、何なのでしょう。

今月は「南無阿弥陀仏」についてこの巻頭特集と本誌後半の「こころの宝石」*「仏教Q&A」*のコーナーで学びたいと思います。

♪幸せってムズかしい

最近、『東京タラレバ娘』というテレビドラマが放映されています。仕事や恋愛に頑張りが、何も実現できぬまま30歳を迎えた3人の女性が語る「あの時、あーだったら」「もっと、こーしてれば」というタラレバ話を、面白おかしくつつ

つくストーリーです。

決して手を抜いて生きているわけではなく、それなりに充実している。なのに、心のどこかに、何か物足りない感覚がいつもある。「人生ってこんなものかな？」と半ばアキラメつつも、言いようのない不安やモヤモヤが晴れない。

「ああ、幸せになるって難しい」

思わず口を突いて、こんな言葉が漏れることも。

♪どうしてこんなにモヤモヤするの？
と自問して思うのは
「それは私が中途半端だから。何か突出したものがあれば、喜べるのでは？」
ではないでしょうか。

*こころの宝石……62ページ～

*仏教Q&A……87ページ～

物や金を持つていれば

喜べる？

では少し、突き抜けた人の話をしてみましょう。

イスラエルの歴史学者が著した『サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福』*は、世界48カ国で200万部を超え、NHKの『クローズアップ現代+』でも取り上げられた話題の書です。この本では、人類の歴史を次のように述べています。「人類の発展といっても、幸福の追求以外にはなかった——」

ここでいわれる「幸福」とは、つまり

ところ「今より多くの富を得て豊になること」でしょう。人類は今も、あらゆる知恵を絞ってこの幸福追求に奔走している、この本の著者も語っています。その帰結が、今日の資本主義中心の世界だといえるでしょう。

資本主義社会の象徴である資産の総量は、政治や経済の進歩により、確かに増大しました。ところが、持つ者と持たざる者との経済格差は広がるばかりで、世界の富裕者8人の資産総額が、貧困者下位の36億人の資産に匹敵するといわれています。ごくわずかな人々に、世界の富が集中しているのです。では、財産を手にした人たちは、幸せを獲得したのでしょうか。

その証言を聞いてみましょう。

「海運王」といわれ、ケネディ元アメリカ大統領の未亡人・ジャクリーンと結婚したことで有名なギリシャの実業家、アリストテレス・オナシスは、並外れた商才を生かし、ビジネスで成功しました。莫大な財産で思いのままに生きた彼の死後、3歳の孫が相続した遺産総額は1兆円ともいわれます。ところがそのオナシスが、最期にこう述べたということです。「私の生涯は、黄金のじゅうたんを敷き詰めたトンネルの中を走ってきたようなものだ。トンネルの向こうには幸せがあると思う、出口を求めて走ったが、走れば走るほど、トンネルもまた長く延びて



*アリストテレス・オナシス……1906年～1975年

いった。幸福とは遠くに見える出口の明かりなのだろう。だが、黄金のトンネルからそこには、たどり着けないのかもしれない」

今日、8兆円とも9兆円ともいわれる資産を持つマイクロソフト社の創業者、ビル・ゲイツ氏は、

「金持ちだからといって、それで得することはあまりない」と述べています。世界一の長者になっても、特別な感慨はないようです。

かつて日本国内の長者番付で上位に入った不動産会社の社長は、70歳を過ぎてからこんな思いを抱くようになった。

「70歳を過ぎた瞬間に、すべてが虚しくなりました。自分の人生を振り返って、人間として今後いかにあるべきかを考えるような年齢に達したんです。いまの商売はもう広げません。後片付けの段階ですね。私の友人でも、資産家が4～5人いましたが、みんな50歳前後で逝ってしまいました。みんな、いまが永遠に続くと思っていたんですが、おカネはあの世に持っていけませんからね。残酷なものです」*

多くの人はお金や物に「私を幸にする力がある」と信じ、人生のほとんども仕事を費やしていますが、必死に働いて

巨万の富を持つ身になっても、幸福感は得られていないと言っています。

お釈迦さまの 驚くべき指摘

この真実を、2600年前のお釈迦さまは、こう喝破されています。『大無量寿経』にある、

「有無同然（有無、同じく然り）」

というお言葉です。有っても苦、無くても苦、苦しんでいることは同じである、ということです。



かわいい彼女ができて、今度は束縛の苦しみが……

例えば、恋人がいなくて寂しいと嘆いていた青年に、ふとした縁で彼女ができた。かわいくて魅力的だが、嫉妬深いその娘は、何かにつけて彼の行動を束縛する。寂しさは癒やされたが、今度は自由がなくなつたと、彼は嘆いています。
結婚して、待望の子供に恵まれても、

今度は定員の少ない保育所に預けようと、「席」の確保に必死です。もし入れなければ、母親は働けず、その家の経済的損失は相当なものになります。

そんな心配から、子供を持たない夫婦が増えているそうですが、それはそれで、家の中が寂しく、老後の不安も出てきます。

「有無、同じく然り」とは、持つ者も、持たざる者も、皆、思いどおりにならないと苦しんでいる。それは、持つ者は金の鎖、持たざる者は鉄の鎖につながれているようなもの。鎖の材質は違っても、つながれて苦しんでいることは変わらないのです。

なぜ人は

苦しんでいるのか

その解決の道は？

では、なぜ私たちは「有無同然」といわれるように、皆、苦しんでいるのでしょうか。それは物の有無ではなく、「心」の問題なのだよ、とお釈迦さまは教導されます。何をどれだけ手に入れても満たされないのは、心に闇を抱えているからだ」と仰るのです。

それはちょうど、熱病の者はどんな山海の珍味も味わえないように、心の暗い人はどんな幸福も味わえないのです。

「南無阿弥陀仏」とは、よく妙薬に例えられます。これは肉体に効く薬ではなく、私たちのこの心の闇を一瞬で破り、明るく楽しい心にする力、効能のある薬なのです。その「南無阿弥陀仏」の効能を説明したものが、七千余巻の一切経なのだと思います。それはお釈迦さまが35歳で仏となられてから80歳でお亡くなりになるまでの45年間説かれた經典の数々です。

あの膨大な一切経は、実は「南無阿弥陀仏」の解説書であり、圧縮すればこの六字に収まる、といわれます。

親鸞聖人は「南無阿弥陀仏」を「功德の大宝海」と言われています。

「功德の大宝海に帰入すれば、必ず大会衆の数に入ることを獲」

(正信偈)

この「南無阿弥陀仏」の大功徳を獲得すれば、どんな人も絶対の幸福となつて、無くてよし、有つてよしの「心の長者」になれると仰っているのです。

「南無阿弥陀仏」の六字には私たちを幸せにする絶大な力がおさまっていると説くのが仏教であることを、「こころの宝石」で詳しくお話しいたします。

(U)



- * 功德……幸福にする善根、働き
- * 大会衆……絶対の幸福になった人たち
- * 正信偈……親鸞聖人が正しい信心を明らかにされた詩
- * こころの宝石……62ページ～